
新刊紹介

阪井興志雄：マリモの科学

202頁，北海道大学図書刊行会，1991，1854円。

本書の著者は，北海道大学理学部在学当時からマリモを含む緑藻シオグサ属の分類の研究を行ない，学位論文（1964年）で，マリモの分類と分布を明らかにした。その後も，マリモの生態の研究，マリモ調査団に加わるなど，生涯マリモに興味を持ち続けたマリモ研究の第一人者である。

本書は，古くから神秘的謎の多い植物とされてきたマリモを，著者の現在迄の幅広い知識と内外の学術論文，さらに一般に余りに触れられない調査報告書を紐解いて，現在知られるマリモのすべてを平易に解説した一般向きの啓蒙書であるが，また，マリモ生物学を幅広く扱った内容が豊富で充実した学術書としても高く評価できる。

本書は，リンネ氏によってマリモの学名が付けられ（1753）てから，また日本の阿寒湖での発見と種名の同定（1894年）の経緯，マリモが北半球のみに分布するという地球上の分布，生育地の水質，生育状況，阿寒湖の垂直，水平及び場所毎の分布・生育状況，光合成，または比重からみたマリモの浮き沈みの現象，耐凍性が高いが，耐乾性の弱い性質など，その生理・生態が平易に説明されている。また，所謂マリモ球形

体（ビロード状毬団）の他に種々な形状のマリモ糸状体が湖底に生育していること，その湖底のマット状に生育する糸状体から毬団への発達，逆に毬団の破損から種々な糸状体集団への生成の推定，糸状体が極性を変えることによって起こるマリモ毬団形成の西村真琴氏（1923年）の説，実験室の培養結果からマリモの直径と年齢との関係を計算し，直径15 cmのマリモが19年生（1式）または22年生（2式）と推定した著者ら（阪井・山田 1961年）の研究が紹介され，マリモの謎解の現状を知ることが出来る。日本の淡水産マリモはシオグサ属マリモ亜属に所属し，マリモとヒメマリモの2種があり，それぞれの品種の特性と分布がスケッチと写真で説明されている。最終章では，阿寒湖のマリモの被害と保護対策の現状を説明し，年毎の水質・底質の悪化と水位の低下，盗採などの被害を憂慮して，適切なる保護対策の必要を述べている。

著者が希望しているように，本書がマリモの研究・調査に役立てられるとともに，多くの愛読者がマリモの保護対策・保存に理解を示され，一層協力されて，この美しいマリモを永久に阿寒湖の宝として残したいものである。

（福井県小浜市飯盛128-6 梅崎 勇）